

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2009年3月

博士論文審査報告書

論文題目：東京語の動詞・複合動詞アクセントの習得
—北京・上海方言話者を対象として—

申請者氏名：劉 佳琦（りゅう かき）

主査 戸田 貴子（大学院日本語教育研究科教授）

副査 鈴木 義昭（大学院日本語教育研究科教授）

副査 吉岡 英幸（大学院日本語教育研究科教授）

1. 論文の主題と視座

本論文は、北京・上海方言話者による東京語の動詞・複合動詞のアクセント習得に関する実証的研究である。日本語学習者を対象とした生成調査・アンケート・インタビューに加え、日本語教師を対象としたアンケート・インタビュー、教科書分析、発音授業の参与観察など、多角的な視点から調査を行うことにより、アクセント習得に関わる要因を明らかにし、日本語教育現場におけるアクセントの教育と学習について提言を行っている。

これまで、中国語母語話者の日本語アクセントには母語転移が見られることが度々指摘されてきた。また、その特徴には、学習者の母方言の差異が関与しているのではないかという点についても言及されている。しかし、中国語母語話者の音声に関する先行研究の大半は、北京方言話者を対象に「母語干渉」という視点から分析が行われてきたため、その実態は明らかになっていなかった。日本語と北京語、日本語と上海語という単方向の対照的研究ではなく、本研究のように、日本語、北京語、上海語という三言語を扱った研究は、きわめて稀である。

研究の発端となる問題意識として指摘されているのは、日本語教育の現場において十分な音声教育が行われていないということである。本研究で扱われている「動詞」は日本語教育において常に導入されるものであるが、動詞の活用時もしくは複合動詞になった場合、アクセントが単純動詞とは異なっている。自身が日本語学習者として日本語を学んだ経験から、このようなアクセントの変化に気づき、疑問に思う学習者は少なくないと述べている。ところが、教室では音声的特徴については言及されることなく、学習者の疑問に答えられていないのが現状であるという。そこで、本研究はこのような現状を改善するために、学習者音声の特徴を把握した上で、研究成果を踏まえてアクセントの教育と学習に提言することを目的として行われている。

本論文で設定されている研究目的は次の3つである。

- 1) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの生成状況を調査し、習得に影響する要因を明らかにする。
- 2) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習を調査し、習得に与える影響を明らかにする。
- 3) アクセントの教育と学習の現状を把握したうえで、北京・上海方言話者を対象とした東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習に提言する。

2. 論文の構成と研究方法

本論文は、第 8 章から構成されている。第 1 章では、研究背景、研究目的、意義を述べ、論文の構成と概要について説明している。

第 2 章では、本研究の位置づけを明確にするために、第二言語習得に関する諸仮説（変異性モデル、有標性弁別仮説、最適性理論、自然順序性仮説、モニター仮説、インプット仮説等）を概観し、中国方言の声調体系、東京語のアクセント、アクセント習得に関する先行研究を読破し、整理している。北京・上海方言話者による動詞・複合動詞のアクセント習得を論じるために不可欠な北京方言と上海方言の声調の相違点については、本章で述べられている。また、音節レベルの基本声調に加え、音節が連続したときに起こる連続変調の特徴についても説明されている。

第 3 章では、中国方言の声調の生成に関して調査を行っている（調査 1）。近年、テレビなどのメディアの影響で中国標準語の普及が進み、中国標準語が方言使用にも影響を与えている可能性があるため、調査 1 では、規則的な母方言声調ならびに変調が実現されているかどうかを調べている。北京・上海方言話者による単音節および 2, 3 音節語をランダムに録音したものを母方言話者に評価してもらうと同時に、音声刺激の音響解析を行っている。本章では、調査協力者の選定が慎重に行われており、前述の母方言話者による評価および音響分析に加え、民族的背景（漢民族）、生育地（北京市内・上海市内）、両親・保育者の出身地、家庭内使用言語、標準語の使用開始年齢についても考慮されている。

第 4 章では、東京語の動詞アクセントの生成について調査を行っている（調査 2）。調査 2 では、平板式・起伏式動詞 30 語の各「辞書形」「ナイ形」「テ形」「仮定形」「テイル形」計 150 語を録音し、東京都出身の日本語母語話者 5 名に評価を依頼している。調査結果は、1) 正用率、2) 「正用」アクセントパターン、3) 「誤用」アクセントパターンに分類し、報告している。その結果、北京・上海方言話者による東京語の動詞アクセントの生成には、母方言の正負転移に加え、言語の普遍的特徴と音声教育の影響が見られることが明らかになった。また、評価者の動詞アクセントにおける許容度という視点からも考察を加えている。その他の要因として、ポーズの挿入、強弱、ピッチの変動幅が評価に影響することを明らかにしている。

第 5 章では、60 語の複合動詞アクセントの生成に関して調査を行った（調査 3）。本章では、母方言の声調に語レベルの変調が存在する上海方言話者のほうが、北京方言話者より複合動詞のアクセントの実現が容易であり、語レベルの変調を持たない北京方言話者は、

ピッチの上げ下げ型の誤用を多発することを指摘している。一方、両方言話者に「アクセント核を軽音節より重音節に置きやすい」という言語の普遍的特徴の影響が見られることも指摘している。また、音声教育の影響としては、音韻知識のインプットの少ない上海方言話者の場合、産出するアクセントの型が-2型に集中する「型集中」の傾向が見られ、逆に、音韻知識のインプットの多い北京方言話者には、アクセントパターンのバリエーションが多い「型拡散」の傾向が見られることがわかった。考察では、音韻知識のインプットだけでは、北京方言話者のピッチの上げ下げ型の誤用を抑制することはできないと述べ、知識の導入だけではアクセントの上達は期待できないことを指摘している。以上の調査をとおして、東京語の動詞・複合動詞アクセントの生成状況を確認し、習得に影響する要因を明らかにした。

第6章では、まず、教師側の発音指導に対する意識、音声教育の内容や方法を調査した(調査4)。調査協力校に勤務する日本語教師を対象に、発音指導の意識に関するアンケートおよび音声教育に関する半構造化インタビューを行った。調査協力者数は、北京(3校)では5名、上海(2校)では4名である。次に、調査5では北京(3校)と上海(2校)の調査協力校で使用されている教科書における音声項目の記述、音声解説を分析し、比較した。また、調査6では、調査協力校で実施されている発音授業において、授業の進行過程、教師の指摘・訂正、発音指導方法、練習方法、学習者の反応などを中心に参与観察を行った。一連の調査の結果、北京と上海では音声教育の実態が異なり、北京(3校)では、学習者全員対象に発音授業を開講したり、教科書では音声項目に関する解説が充実していたり、発音指導方法に工夫が見られることなどが明らかになった。一方、上海(2校)では、発音授業は一部の学生のみ履修し、教科書に音声に関する解説が少なく、発音指導方法も単調であるというような問題点が指摘されている。

上記のように教師側による教室活動という視点から音声教育の実態を明らかにするとともに、学習者側の特徴も明らかにしている。調査7では、学習動機と学習ストラテジーに関するアンケートと、学習リソースや学習時間などに関する日本語学習についてのアンケートを実施し、学習者の個人要因について調査した。その結果、本研究の発音上位群に共通する特徴は、1) 明確な学習動機、2) 多様な学習ストラテジーの使用、3) 自己評価型ストラテジーの使用、4) 目標依存型ストラテジーの使用、5) 発音学習の焦点化、6) 音声化した発音練習方法の使用であり、これらが発音習得に結びつくことが示唆されている。

第7章では東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習への提言を行っている。本研究で行われた一連の調査の結果から、各方言話者に対して、母方言からの転移を考慮に入れたアクセント指導法を考案している。特に、上げ下げ型の誤用を多発する北京方言話者には、一定のピッチの高さを維持するという目的で、平板式動詞「テイル形」のアクセント指導の際「白花花」のように重ね言葉が含まれる「叠音形容詞」を利用した発音指導を提案し、現場の教師が使用できるよう、使用頻度の上位10語を選出して使用可能語彙リストを作成した。一方、起伏式動詞「テイル形」のアクセント指導には、北京方言の軽声を利用した指導方法を提案し、10語を選出して軽声化語彙リストを作成した。これらを北京方言話者5名に使用して確認したところ、「叠音形容詞」や軽声化語彙の応用が日本語アクセントのイメージ作りに役立つという意見が得られた。

3. 論文の評価と今後の課題

本研究の評価できる点は、以下の5点である。

1) 北京方言話者と上海方言話者によるアクセントを比較検証し相違点を明らかにした点

本研究では、北京方言話者と上海方言話者を対象に方言差がアクセント習得に与える影響を明らかにした点が高く評価できる。調査協力者の選定も民族的背景（漢民族）、生育地（北京市内・上海市内）、両親・保育者の出身地、家庭内使用言語、標準語の使用開始年齢を考慮し、極めて慎重に行われており、調査結果の信憑性が高いと言えよう。上海市出身の上海方言話者にも近年メディアの影響により中国標準語が方言使用にも影響を与えている可能性があるため、規則的な声調が実現されているかということについても母方言話者による評価と音響解析に基づき、調査協力者の選定を行っている。

2) 従来の研究の枠組みを超えた視座から精緻な記述と分析を行った点

本研究では、中国語母語話者によるアクセントの実態把握のために、従来の研究の枠組みを超えた視座から精緻な記述と分析を行った点が高く評価できる。日本語と中国語の音韻体系の比較から、どのような母語干渉が起こるかということに焦点を当てた場合、母語の負の転移（母語の体系が習得にマイナスの影響を及ぼすこと）しか見えてこないことが予想される。しかし、本研究では、従来の研究を踏まえ、母語干渉の傾向に注意を払いつつも、従来の「誤用分析」の枠組みに見られるように「誤用」のみに焦点を当てるのではなく、正用も含んだ上で学習者音声を総合的な観点から分析

した。このような視座に立つことにより、負の転移に加えて、正の転移（母語の体系が習得にプラスの影響を及ぼすこと）や、言語の普遍的特徴の影響（平板式アクセントが困難である、重音節にアクセント核を置く）も明らかにすることが可能となった。

3) アクセント習得における音声教育の影響を明らかにした点

本研究では、教師による指導や使用教材などを視野に入れつつ、日本語教育と音声との関係を見据えて実態把握を試みたことにより、今後の音声習得研究に新たな方向性を示した点が高く評価できる。たとえば、音韻知識のインプットの少ない上海方言話者の場合、産出するアクセントの型が発音しやすいアクセント型に集中し、逆に、音韻知識のインプットの多い北京方言話者には、アクセントパターンのバリエーションが増えた。しかし、バリエーションが増えることは必ずしも正用に結びつくということではなく、音韻知識のインプットだけでは、北京方言話者のピッチの上げ下げ型の誤用を抑制することはできないということが明らかになった。このことは、音声教育と称して音韻知識を導入するだけでは発音能力の向上に貢献しないということを具体的に示しており、日本語教育現場に重要な示唆を与えるものとして評価されよう。

4) アクセント習得における個人要因の影響を明らかにした点

本研究では、学習者音声は単に母語と目標言語の音韻体系の相違に基づいて産出されるのではなく、学習者主体が様々な要因に影響を受けつつ生み出されるものであるという考えに基づき、音声習得に関与する学習者の個人要因を明らかにした点が高く評価できる。学習動機と学習ストラテジーに関するアンケートと、学習リソースや学習時間などに関する日本語学習についてのアンケートの結果から明らかになった発音上位群に共通した特徴、すなわち発音学習の焦点化や音声化した発音練習方法の使用などは、日本語教育現場における音声教育方法の検討にも役立つものである。

5) アクセントの教育と学習への提言が具体的で日本語教育現場に役立つ点

本研究で明らかになった各方言話者による母方言からの転移を考慮しつつ、母方言の特徴を活用して本来困難であるアクセントのイメージ作りを行うという独創的かつ具体的なアクセント指導法を考案している点が高く評価できる。また、実際の練習用に語彙リストを提示するなど、現地の非日本語母語話者教師も使用しやすいという点で、中国語母語話者のための音声教育の発展に貢献しうるものであることが、優れた成果である。

本論文では、受理審査の際に指摘された問題点の多くが加筆修正により改善されており、

特に、第7章で議論された東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習への提言では、内容が具体性を増しており、日本語教育現場にも貢献できるものとなった。しかし、以下の3点が問題点として残されている。

- 1) 今回の調査では、アクセントに関する音韻知識のインプットが多い北京方言話者とインプットが少ない上海方言話者が対象となっているが、本論文の論証結果の信頼性を高めるためには、インプットの多い上海方言話者やインプットの少ない北京方言話者を対象とする調査・分析が必要である。本研究の調査結果から導き出される予想としては、インプットの多い上海方言話者には型集中から型拡散の特徴が見られ、インプットの少ない北京方言話者には型集中および母方言の負の転移の抑制不可という傾向が見られるであろうと述べているが、実際に調査を行って確認する必要がある。
- 2) 北京・上海方言話者に対する具体的な指導の提案を行ったことは評価に値するが、体系的な指導の効果検証は行われていない。今後も関連教材などを調査して問題点を把握しつつ、実践を重ねていくことにより、中国語話者のための日本語音声教育へのさらなる貢献が期待される。
- 3) 今回は調査対象としなかったが、中国語母語話者が特に母語の影響を受けやすいと思われる漢字語彙の発音に関する調査など、他の品詞についても調査の余地が残されている。

以上のような課題を残しつつも、本論文は、優れた学術研究として高く評価することができる。以上をもって、本論文が日本語教育学博士号の学位に値する論文であることを報告する。